〈ケア〉を考える会（第 104 回）

■日時：**2015 年 10 月 12 日** 13：30～17：30

■会場：京都市山科区安朱中溝町３-２
山科駅より東 徒歩３～４分の民家 （山添）
（安朱保育園 東隣）

■当日の大まかな予定
13：00 ⇒ 有志集合…会場準備等
13：30～ ⇒ 学習会(読書会)
15：30 頃～ ⇒ 懇親会（笑いヨガなども）
17：00～17：30 ⇒ 片付け、終了
（その後で、名残惜しコーヒータイム ？ ）

■内容
（１）学びの会（読書会）

鷲田清一『老いの空白』（岩波現代文庫、2015 年刊）

「３ 〈老い〉の時間――見えない〈成熟〉のかたち 」

（２）懇親会‥‥食べながら飲みながら語り合います（持ち込み歓迎）
※山添さんご夫妻の手料理は絶品です。美味しいこと請け合い
※懇親会参加者で実費（1000 円程度）ご負担願います

★参加申し込み、問い合わせ、メーリングリスト登録希望
⇒ 林まで ： 884michiya@gmail.com

★どなたでも参加できます。初参加歓迎。飛び入り参加、突然参加もありです。
★読書会は、本を読んでいなくても遠慮なく参加できます。読んできてほしいけど‥‥。

▼おたがいの言葉を手がかりに考える時間をもつこと、確かめながらゆっくりと考える時間を共にし、分け合う
「考え」でなく、「考え方」をお互い共有してゆく
結論はありません
プロセスをゆたかに

（長田弘『なつかしい時間』P.191）

ひととひととの関係において重要なのは、各人が主体的にどのようにしようとしているかではなくて、いつとはなしにお互いが心を開いてしまっているという事態である。

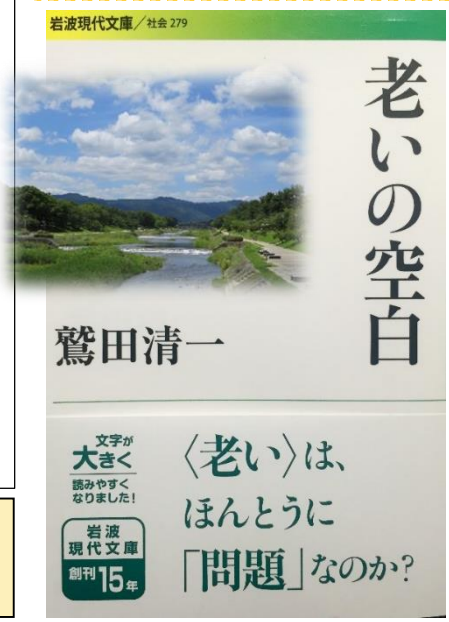
（池上哲司『傍らにあること』P.169）

「老いの空白」ノート

▼いのちの本質をその生産性にみる見方のなかでは、〈老い〉はその衰弱としてみられ、そしてできれば遠ざけたいもの、回避したいものとして受けとめられる。「老残」「老醜」「老廃」と言った言葉にもみられるように、〈老い〉とは、死と近接した、あるいは退行性のなかに埋もれた、おぞましいものとされる。生産性を軸とする社会のなかに老人と子どもを滑らかに（都合よく）組み入れるために、「老残」「老醜」「老廃」を脱臭した「愛すべき」老人と「愛らしい」子どものイメージのうちに〈老い〉と〈幼さ〉が封じ込められて行く。愛されるにふさわしい老人も、可愛がられるにふさわしい子どもも、ともに受け身の存在であることを暗に求められる。老人が受動的な存在であること、〈老い〉が他律的なものであることが強いられてきたのである。〈老い〉と〈幼さ〉というものを、社会の現役以前、以後というふうにネガティブにとらえるのは、産業社会の特殊な思想なのである。（75-76 頁）

▼〈いのち〉を何ものかを生みだす、あるいは志向する、その「力」の方から見るというのは、〈いのち〉のエッセンスを、時間を劈く推力にみる見方である。こういう、〈老い〉を〈いのち〉の閉じた論理の中でとらえる考え方では、いいかえると誕生－成長－成熟－老衰－死というリニアな時間系列のなかでとらえる見方では、〈老い〉は滅びの宿命となる。

これに対して、〈老い〉を〈いのち〉のなかに閉じ込めずに、〈いのち〉と二重になっているものとしてとらえること、そういう意味で〈いのち〉の狭い論理を広げることが必要なのではないか。（79 頁）



「〈ケア〉を考える会」ホームページ
http://care-kyoto.jimdo.com/

岡山でも：「〈ケア〉を考える会-岡山」
http://okayama-care.jimdo.com/